事件

作：村川拓也

作品概要

2018年11月16日（金）14時ごろ、京都市内のスーパーで刺傷事件がありました。私はその日、実際にこのスーパーの中にいました。今回の戯曲はその事件を題材にしています。

私はその日、娘をおんぶしながら買物に来ていました。遅い昼ご飯の食材を買おうと、うどんと油揚げを手に持って今からレジに行こうとしていたとき、レジの方で悲鳴が上がりました。私を含め、周りにいた人たちは一体何が起こったのかまったくわからない状況でした。悲鳴が上がったあと、現場の近くにいた店員や客が一斉に走り出し、その場から離れていきました。私は何が起こったのかわからないまま、手に持っていた食材をひとまず近くの商品棚に置いて、いつでも逃げ出せる準備をしました。すると、いろんな方向から「刺された」という言葉が聞こえてきました。すぐに逃げ出さないといけないのに、なぜだか確認したい気持ちになり、私は現場近くまで様子を見に行きました。そこには、男性が一人立ち尽くし、叫び声を上げています。「刺しよった、刺しよった、逃げよった」と言っています。男性のすぐ足下に目をやると一人の店員が下に倒れていて、ドラマで見るような、血だまりができていました。これを見た瞬間にさすがにもう逃げなきゃと思い、すぐにスーパーから出ました。ここまで時間にするとほんとに一瞬の事だったと思いますが、スーパーから出る前になんどか周りを見渡していて、刺された人の姿と同じくらい、周りの人々の状況に驚きました。なぜかというと、人が人を刺した瞬間に、その近くにいなくて、もっと遠くにいて買物を続けていた人達は、事件に気づかず、まだ買物を続けていたからです。例えば肉売り場とか、魚売り場にいた人はまったく何も気づいていない。私がスーパーを出ようと決めたときですら、後ろを振り返ると向こうの方で、どの魚にしようか迷いながら買物を続けている客の姿があったのです。すごく奇妙な感じがしました。

私はこの戯曲で描きたかったことが大きく二つあります。一つは、なぜこういった事件が起こってしまったのかを検証したかったということです。それは、私自身が日々感じてきた、現代の消費社会や労働環境の圧迫感に関係しています。過剰な広告や効率化や善意に対し、常に違和感を感じています。もう一つは、今回の事件を自分自身が当事者として経験してしまったことから感じた問いについてです。平日の昼下がり、子供と一緒にスーパーに買物に行く姿というのは、一見平和そのものですが、その平和の中にも常に漠然とした不安を感じてしまうものです。その不安は直接、「刺されるかもしれない」という極端なものではないですが、そういった不安や恐怖と常に隣り合わせにある日常というのを否応なく、突きつけられた感じがありました。あまり考えたくないですが、自分だって何かの拍子に人を刺してしまうかもしれないという、自分自身に対する恐怖もあります。しかし、だからといって、このような事件や恐怖を暴力的に切り捨てるのも違うと思います。切り捨てというのは新しい圧力を生み出してしまうだけです。では、どうすればいいのか。不安や恐怖を切り捨てることなく、平穏な暮しを送るためにはどのような考え方が必要なのか。何がうまくいってなくて、何がうまくいっているのか。どういう変化を望むべきか。そういった問いを戯曲の中に込めてみたいと思いました。

事件

登場人物

ハザマ（スーパーの従業員）

男

店長

従業員

ミキヒロ（不登校の高校生）

服屋の店員

母親（ミキヒロの母親）

友人（ミキヒロの友人）

お客様の声

従業員たちの声

買い物客A

買い物客B

※（声）はすべてスピーカーから流れる。

1

とある地方のスーパーマーケット。

開店前の時間。

ハザマがチャイルドシートの付いた自転車を押してやってくる。

駐輪場に自転車をとめる。

ハザマは従業員用の入口からバックヤードに入る。

先に出勤していた従業員に、

ハザマ「おはようございます」

事務所にいる店長に、

ハザマ「おはようございます」

ハザマ、更衣室に入りロッカーを開けて制服に着替える。着替えながら鼻歌を歌っている。

トイレ掃除をし、保冷剤を取りに行き、売り場の電気をつける。

レジに向かい、レジの立ち上げ作業を行う。

シフト表に出勤時間を記入しようとするが、ボールペンを忘れたようなので、鼻歌を歌いながら更衣室に取りに行く。

ロッカーを開け、ボールペンを取り出すが、スマホが鳴っていることに気づく。スマホの画面を見ると、保育園からの電話だった。ハザマ、電話にでる。

ハザマ「はい。……はい、そうです。……あー、すいません。……すいません、気をつけます。……はい。……あ、ちょっと昨日の夜、微熱がありました。……はい。……はい。……いや、ちょっとこれから仕事なんで迎えには行けないです。すいません。……すいません、ちょっと仕事途中で抜けられなくて。……すいません。……アヤカ、今どんな感じですか？しんどくて泣いたりしてますかね？ ……はい。……すいません、ご迷惑おかけします」

電話を切って、更衣室を出る。

ハザマ、売り場に戻ると、

店長（声）「開店しまーす」

ハザマ、自分の持ち場であるレジに立つ。

ハザマ「いらっしゃいませ、お待たせいたしました。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,500円でございます。2,000円お預かりいたします。500円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

ピッ、ピッ、という商品のバーコードを読み取る無機質な機械音。

ハザマ「いらっしゃいませ、お待たせいたしました。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、2,300円でございます。3,000円お預かりいたします。700円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ。いらっしゃいませ、お待たせいたしました。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、980円でございます。1,000円お預かりいたします。20円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

店長（声）「ハザマさん」
ハザマ「はい」
店長（声）「レジ回りの掃除もお願いします」
ハザマ「わかりました」

ハザマ、レジ周りの掃除をする。

店長（声）「ハザマさん」
ハザマ「はい」
店長（声）「それ終わったら、売り場の温度チェックと、品出しもお願いします」
ハザマ「わかりました」

ハザマ、売り場の温度チェックと、品出しを始める。
男が買い物にやって来る。ハザマ、作業をしながら男に向かって、

ハザマ「いらっしゃいませ」

ハザマ、作業を続ける。男は買い物を始める。
静かな時間が流れる。

不意に、男が手を滑らせてペットボトルのお茶を床に落としてしまう。
ハザマと男は、落ちたペットボトルを見ている。

沈黙。

ハザマ、ペットボトルを拾い、男に手渡す。

男は、軽く頭を下げ、受け取る。ハザマは売り場の作業に戻る。

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「賞味期限チェックも一緒にやっといて」

ハザマ「わかりました」

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「お客さんの配達の手続きした？」

ハザマ「まだです」

店長（声）「早めにやっといてな」

ハザマ「わかりました」

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「買物かご減ってきてるし補充しといてな」

ハザマ「わかりました」

男はこれらのやりとりを聞いている。

男、レジに向かう。

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「倉庫の台車片付けた？」

ハザマ「まだです」

店長（声）「それすぐやっといて」

ハザマ「わかりました」

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「駐車場の掃除行った？」

ハザマ「まだです」

店長（声）「それ先にやっとかなあかんわ」

ハザマ「すいません」

男、店員が来ないのでレジの前で立ち尽くしている。

店長（声）「ハザマさん」
ハザマ「はい」
店長（声）「お客さんに声掛けできてないよ」
ハザマ「すいません」
店長（声）「ハザマさん！」
ハザマ「はい」
店長（声）「レジ！」
ハザマ「……はい」

ハザマ、レジの前に立っている男に気づき、急いでレジに向かう。

ハザマ「いらっしゃいませ、お待たせいたしました。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,800円でございます。2,000円お預かりいたします。200円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

男、出て行く。
ハザマ、他の買い物客の対応を続ける。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、2,800円でございます。3,000円お預かりいたします。200円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」
店長（声）「ハザマさん」
ハザマ「はい」
店長（声）「最近お客さんからクレームきてるよ。もっと笑顔で接客お願いね」
ハザマ「……」
店長（声）「ハザマさん。最近お客さんからクレームきてるよ。もっと笑顔で接客お願いね」
ハザマ「……」
店長（声）「ハザマさん。最近お客さんからクレームきてるよ。もっと笑顔で接客お願いね」
ハザマ「店長。……すいません。さっき保育園から電話がかかってきて、子供が熱ですぐに迎えに行かないといけないんですけど、……お客さんが少なくなってきたら、……仕事途中で抜けさせてもらえないでしょうか」

沈黙。

店長（声）「ハザマさん。時間になったし、今からグリーティングイベント始めるね。いつものように元気な対応、よろしくお願いします！」

ハザマは、自分の希望を店長に聞き入れてもらえず、レジで立ち尽くしている。

従業員（声）「はーい、みなさんこんにちはー。本日はご来店いただきまして、誠にありがとうございまーす。今からグリーティングイベントを始めたいと思いまーす。はい、今日はですね、このお店のマスコットキャラクター、ひーくんが一日店長に就任をいたしました。一日店長ということで店長が実際にやっているお仕事をお手伝いするわけなんですが、ひーくんにできるのでしょうか。店内チェックがあったり、お掃除があったり、お客様へのご挨拶があったりということなんですが、皆さんの前で、ばっちり店長のお仕事ができるように頑張ってもらいたいと思いまーす。みなさん、ぜひ、応援よろしくお願いしまーす。それでは、サカモト店長にお手本をお願いしたいと思います。サカモト店長、お願いします」
店長（声）「はい、了解しました。スタッフ全員で元気にいきましょう。それでは参ります」

ハザマ、売り場をぼんやり眺める。

店長（声）「いらっしゃいませ」
従業員（声）「いらっしゃいませ」
店長（声）「ありがとうございました」
従業員（声）「ありがとうございました」
店長（声）「大変申し訳ございません」
従業員（声）「大変申し訳ございません」
店長（声）「またお越しくださいませ」
従業員（声）「またお越しくださいませ」

何度も繰り返す。
ハザマは、二人の声を聞いている。

店長（声）「ハザマさん。倉庫の掃除行ってもらえる？」

ハザマ、倉庫の掃除に行く。
ハザマが去った後もお客様への挨拶は何度も繰り返される。

店長（声）「いらっしゃいませ」
従業員（声）「いらっしゃいませ」
店長（声）「ありがとうございました」

従業員（声）「ありがとうございました」

店長（声）「大変申し訳ございません」

従業員（声）「大変申し訳ございません」

店長（声）「またお越しくださいませ」

従業員（声）「またお越しくださいませ」

店長（声）「いらっしゃいませ！」

2

ミキヒロの実家。

ミキヒロはベッドに寝ころびながら、ぼんやりとスマフォで動画を見ている。
スマフォからは、カネコアヤノの「祝日」が聞こえる。しばらくすると、

母親（声）「ミキヒロ、もう起きてー」

ミキヒロは母親の声に反応しない。しばらくすると、

母親（声）「ミキヒロ！」

ミキヒロ、体を起こし、ベッドに座る。スマフォを見続けている。

母親（声）「ミキヒロ！」

ミキヒロは仕方なくベッドから下りて立ち上がる。部屋の扉の前に立つが、扉を開けるのを躊躇する。
仕方なく扉を開け、リビングを通り、洗面所に向かう。洗面所で歯を磨く。歯を磨き終え、再びリビングを通り過ぎようとすると、

母親（声）「ミキヒロ、今日高校行かないの？」

ミキヒロは立ち止まるが、何も答えない。
自分の部屋に戻り、着替える。
着替え終わると、再びスマフォを見る。しばらくすると、

母親（声）「ミキヒロ、お母さん片付けしてから行くから、先駐車場行っといて」

ミキヒロ、仕方なく立ち上がり、扉の前に立つ。少しのあいだ、扉を開けるのを躊躇するが、出て行く。
玄関で靴を履き、駐車場へ向かう。車の前に立ち、母親が来るのを待っている。ここでもスマフォを見ている。しばらくすると、

母親（声）「じゃあ行こか」

ミキヒロ、車の助手席に乗る。

母親の運転で近所のショッピングモールに向かう。

母親（声）「ミキヒロ、明日、高校の先生がうちに面談に来るって。これからのことを相談したいって言ってたよ」

ミキヒロは何も答えず、フロントガラスから見える風景をぼんやりと眺めている。

母親（声）「着いたよ」

ミキヒロ、車から降りて、ショッピングモールのエレベーターに乗り、売り場へと向かう。

母親（声）「ミキヒロ、お母さん買い物あるから、買う服決まったら電話ちょうだいね」

ミキヒロは何も答えず、母親を見送る。
服屋に入る。

服屋の店員（声）「いらっしゃいませ」

店員の声に少し緊張しながら、服を選び始める。

服屋の店員（声）「何かお探しですか？」
ミキヒロ「あ、特にないんですけど、上に羽織るシャツとか探してます」
服屋の店員（声）「でしたら、こちらのシャツいかがでしょうか」
ミキヒロ「ああ」
服屋の店員（声）「このシャツ、どんな格好でも合わせやすいですし、生地が薄手になってるんで、これから夏にかけても着られると思いますよ」
ミキヒロ「そうなんですか」
服屋の店員（声）「はい」

ミキヒロは店員の高圧的な態度に畏縮する。店員から逃げるように、他の服を探しに行くが、

服屋の店員（声）「こちらのストライプのシャツなんかも今履いてるズボンにぴったりだと思いますよ」
ミキヒロ「……あ、はい」
服屋の店員（声）「単体で着てもらってもいいし、なんかの上に着てもらってもいいし」
ミキヒロ「……そうなんですね」
服屋の店員（声）「はい」

ミキヒロ「……ちょっと1回着てみてもいいですか」
服屋の店員（声）「はい、かしこまりました。こちら試着室の方でどうぞ」

ミキヒロ、試着室に向かう。

服屋の店員（声）「ごゆっくりどうぞ」

ミキヒロ、シャツの試着を始めようとするが、すぐに、

服屋の店員（声）「いかがですかー」

ミキヒロ、急いでシャツを着る。試着室から出て、

ミキヒロ「……こんな感じなんですけど、どうですかね」
服屋の店員（声）「よくお似合いですよ」
ミキヒロ「……じゃあこのシャツお願いします」
服屋の店員（声）「はい、ありがとうございます。他にも何かご覧になられますか」
ミキヒロ「ちなみにこのシャツに合うズボンてなにかありますか」
服屋の店員（声）「でしたらあの辺のパンツなんかいかがでしょうか」

ミキヒロ、勧められたスボンを見に行く。ズボンを手に取って、

ミキヒロ「……いや、ちょっとこれは」
服屋の店員（声）「今年の流行りのカラーですし、その上のストライプのシャツとも良く合いますよ」
ミキヒロ「あ、そうなんですか」
服屋の店員（声）「うちの店でもよく売れてるし、そのパンツ、セール中なんで、今ならお買い得ですよ」
ミキヒロ「……じゃあ、ちょっとこのズボン履いてみます」
服屋の店員（声）「はい、かしこまりました。こちら試着室の方でどうぞ」

ミキヒロ、試着室に向かう。

服屋の店員（声）「ごゆっくりどうぞ」

ミキヒロ、ズボンの試着を始めようとするが、すぐに、

服屋の店員（声）「いかがですかー」

ミキヒロ、急いでズボンを履く。試着室から出て、

ミキヒロ「……こんな感じなんですけど、どうですかね」
服屋の店員（声）「シャツをズボンに入れて、襟を立たせた方がいい感じだと思いますよ」
ミキヒロ「そうなんですね」
服屋の店員（声）「はい」

ミキヒロ、そうする。

ミキヒロ「……どうですかね」
服屋の店員（声）「よくお似合いですよ」
ミキヒロ「……じゃあこのズボンもお願いします」
服屋の店員（声）「はい、ありがとうございます。他にも何かご覧になられますか」
ミキヒロ「ちなみに靴下ってありますか」
服屋の店員（声）「靴下は置いてないです」
ミキヒロ「……そうですか」
服屋の店員（声）「はい」

少しの沈黙。

服屋の店員（声）「他にも何かご覧になられますか」
ミキヒロ「いや、これで大丈夫です」
服屋の店員（声）「はい、ありがとうございます。それではお会計お願いします」
ミキヒロ「すいません、これ全部着て帰ってもいいですか」
服屋の店員（声）「はい、大丈夫ですよ。お会計お願いします」

ミキヒロ、急いでレジに向かう。

服屋の店員（声）「それでは 2 点でお会計 7,900 円になります。1 万円お預かりします。2,100 円のお返しとレシートでございます。ありがとうございました」

ミキヒロ、いそいそと服屋を出ようとすると、店員の気だるい声。

服屋の店員（声）「ありがとうございました。またお越しくださいませ」

ミキヒロ、服屋を出て、エレベーターに乗り、駐車場へ向かう。
車の助手席に乗り込み、母親が運転する車が発進する。しばらくすると、

母親（声）「ミキヒロ。その服いいね。よく似合ってるよ」

ミキヒロは何も答えず、フロントガラスから見える風景を見ているが、母親に何か大事な事を言おうとしている。
言おうとするが、なかなか声にすることができない。

ようやく、ミキヒロは声を出す。

ミキヒロ「お母さん……今から友だちと会うから駅前で降ろして」

車は駅前に到着する。ミキヒロは車を降りて、母親が運転する車を見送る。
すこし歩き、友人との待ち合わせ場所に到着する。友人はまだ来ておらず、ミキヒロは一人で待ち合わせ場所に立っている。しばらくすると、友人がやってくる。

ミキヒロ「ういっす」
友人「なにそれ」
ミキヒロ「え？」
友人「服、インしてるやん」
ミキヒロ「……うん」
友人「きしょ」

長い沈黙。

ミキヒロは、ズボンのポケットからスマフォを取り出し、動画を再生する。
スマフォからは、カネコアヤノの「祝日」が流れる。
突然、ミキヒロはついさっき買った新しい服を脱ぎ始める。
脱ぎ終わると、その服を地面に叩きつける。

カネコアヤノの「祝日」が流れている。

3

再び、スーパーマーケット。

昼過ぎの時間。

ハザマが台車に商品を乗せて、ゆっくりと売り場へやって来る。売り場に着くと、一つ一つ商品の品出しを始める。

商品を手に取る音、商品を並べる音、台車が進む音、それらの音が静かに聞こえる。

ハザマ、品出しを終え、バックヤードに戻ると、

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「15 分休憩行っていいよ」

ハザマ、更衣室に入り、エプロンを外し、ロッカーから財布を取り出し、売り場へ向かう。

売り場に入り、さっき自分が並べた商品をゆっくりと見回す。

じゃがりことアンパンマンのおまけがついているお菓子を手に取り、レジに向かう。

レジを済ませ、更衣室に戻り、その場に立ったままじゃがりこを食べる。

長いあいだ、なにも考えず、ただじゃがりこを食べている。しばらくすると、

店長（声）「ハザマさん、15 分たったよ」

ハザマ、休憩を終えて更衣室から出ると、業務連絡のアナウンスが入る。

店長（声）「業務連絡いたします。2 番レジ、3 番業務お願いします」

店長（声）「業務連絡いたします。3 番レジ、食品課長お願いします」

ハザマ、売り場へ戻り、商品の前出し作業を始める。

再び、男が買物にやって来る。

店長（声）「業務連絡いたします。4 番レジ、キャリーサービスお願いします」

店長（声）「業務連絡いたします。レジ開放お願いします」

店長（声）「業務連絡いたします。フロアチェックお願いします」

ハザマは作業を続けている。男は買物を続けている。業務連絡のアナウンスはさらに続く。

店長（声）「業務連絡いたします。2番レジ、3番業務お願いします」
店長（声）「業務連絡いたします。3番レジ、食品課長お願いします」

不意に、男が手を滑らせてペットボトルのお茶を床に落としてしまう。
ハザマと男は、落ちたペットボトルを見ている。

沈黙。

ハザマ、ペットボトルを拾い、男に手渡す。
男は、軽く頭を下げ、受け取る。
ハザマは売り場の作業に戻る。業務連絡のアナウンスは続いている。

店長（声）「業務連絡いたします。4番レジ、キャリーサービスお願いします」
店長（声）「業務連絡いたします。レジ開放お願いします」
店長（声）「業務連絡いたします。フロアチェックお願いします」

しばらくすると、男がレジの前に立っている。ハザマはレジの前に立っている男には気づいていない。
男は、さっき落としたペットボトルを手に持ち、今度は故意に床に落とす。ペットボトルが落ちる音。
その音に気づいて、ハザマは急いでレジに向かう。

ハザマ「いらっしゃいませ、お待たせいたしました。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,800円でございます。2,000円お預かりいたします。200円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

男は去らず、その場に突っ立っている。つまり、ハザマの目の前に立っている。

男「……ハザマさん、でもほんまに無理やったら、娘さん、保育園に迎えに行ったらいいんじゃないですか」

男は、ペットボトルの入った買物かごを売り場に放り投げる。その音が店内に響き渡る。
男、去る。

沈黙。

ハザマ、なにかを決意し、走って売り場を通り抜け、駐輪場へ向かう。
仕事を放棄し、力一杯自転車のペダルを踏み、スーパーマーケットをあとにする。

4

誰もいないスーパーマーケット。

薄暗く、閉店後のような雰囲気。

店内に設置してあるディスプレイには、化粧品の企業CMが流れている。

店長が掃除道具を持って、ふらふらと売り場に入ってくる。掃除道具を置いて、売り場に置いてあるじゃがりこを手に取り、おもむろに食べ始める。しばらくすると「お客様の声」が聞こえてくる。

お客様の声（声）「店長さんへ。売り場にあるバナナを丁寧に扱って欲しいです。店員さんが少し乱暴に置いているのを見ました。注意してください」

お客様の声（声）「店長さんへ。プラカップ入りのトマトを店員さんが床に落としました。そのあと落ちたトマトをそのままカップに戻していました。せめて客の目に触れないところでやって欲しいです。気をつけてください」

お客様の声（声）「店長さんへ。トイレの便座、冷たいです。すぐに暖かくしてください」

お客様の声（声）「店長さんへ。ポイントカードの案内がわかりにくいです。わかりやすい説明をすぐにお願いします」

お客様の声（声）「店長さんへ。午前 11:30 頃、1F の左のレジにいた店員はお金を預かっても、おつりを「ハイ」というだけで、ありがとうございましたの一言もありませんでした。もちろん、いらっしゃいませも言わない。いったいどういう教育をされているのでしょうか。接客業としてあるまじき態度の悪さでびっくりしました。注意してください」

店長、売り場のペットボトルのお茶を手に取り、飲む。再び、じゃがりこを食べつづける。

「お客様の声」をぼんやりと聞き続けている。

お客様の声（声）「店長さんへ。カゴが汚いことが多いです。すぐにきれいにしてください」

お客様の声（声）「店長さんへ。肉売り場の中に竜田あげを販売するのはどうなんでしょうか。衛生的にダメだと思います。ありえない」

お客様の声（声）「店長さんへ。吉田さんの接客最悪。すぐに注意してください」

お客様の声（声）「店長さんへ。レジで順番を待っていると、となりのレジがあきましたが 「次にお並びの方どうぞ」という声もなく、後から来た客が先にレジに行きました。他のスーパーでは最近こういう事はありませんが ここでは時々感じます。すぐに注意してください」

お客様の声（声）「店長さんへ。パンの割引シールを貼る際、裏面の商品名を隠さないよう注意いただきたい。特に、冷食横の割引コーナーに移動した後は、棚の商品ラベルがないため、何味のパンなのか分からないので購入しづらいです。バーコードを隠さなければならないのは分かりますが、そのすぐ下が商品名なのです。すぐに確認よろしくお願いします」

店長、じゃがりこを全部食べ終えて、再びお茶を飲みに行く。

ポケットからたばこを取り出し、火をつけ、吸う。

お客様の声（声）「店長さんへ。1階の女性用のトイレ、尿臭がして不快感があります。すぐに掃除してください」
お客様の声（声）「店長さんへ。このお店が新しくなって、買いにくくなったなあというのが正直な所です。元４階の日用品売場がドラッグストアになりましたが、 近隣にドラッグストアが山程ある中で、これ以上必要でしょうか？　ちょっとした文房具や日用品を買う所がなくなってしまいました。本当に不便になりました。私が小さい頃からこのお店は楽しい場所でした。地元の人を大切にしたスーパーを残してほしいと思います。よく考えてください」

「お客様の声」から「従業員たちの声」に切り替わる。

従業員たちの声（声）「店長とはそんなに話はしたことなくて、たぶん結婚されてて、子どもがいて、亭主関白気味な父親なんだろうなていう感じの人で、店長は目力が強くて、何か言われたら絶対断れない空気があります」

店長、たばこを消して、売り場にある生麺のうどんを手に取り、食べ始める。
「従業員たちの声」をぼんやりと聞き続ける。

従業員たちの声（声）「店長は、優しくて、仕事終わりに好きな飲み物を買ってくれる人です」
従業員たちの声（声）「店長は、従業員にもずっと敬語で話してて、あんまり距離を詰めてこようとしない人です」
従業員たちの声（声）「店長は、最初の面接の時に不登校の息子がいるっていう話をしていました」
従業員たちの声（声）「店長は、急に馴れ馴れしく話しかけてくる人です」
従業員たちの声（声）「店長は、失敗したものとかロスになったものを、なんのためらいもなくゴミ箱にガサっと捨てる人です」

店長、お茶を飲みに行く。

従業員たちの声（声）「店長は、1回長期休みをとったら、復帰してからもずっとシフト入れってうるさく言ってくる人です」
従業員たちの声（声）「店長は、従業員を集めて懇親会とかパーティを開いたりするような人です」

店長、再びうどんを食べる。

従業員たちの声（声）「店長は、基本的には怒らないでニコニコしてるけど、急に怖い顔になります」
従業員たちの声（声）「店長は、2週間に1回ぐらいのペースで、近所のタピオカ屋さんでみんなの分のタピオカを買ってきてくれます」
従業員たちの声（声）「店長の目は色盲で、物の色がわからなくて、でも花がきれいなのはわかるっていう話をしていました」
従業員たちの声（声）「店長は、奥さんと仲が良いです」

店長、お茶を飲みに行く。

従業員たちの声（声）「店長は、退勤するのが遅い時間になったら車で送ってくれます」
従業員たちの声（声）「店長は、家族で旅行に行ったシンガポールの動画をよく見せてきます」
従業員たちの声（声）「店長は、小学校低学年くらいの娘さんがいます」

店長、売り場のキャベツの前に立ち、キャベツを眺める。

従業員たちの声（声）「店長は、2時間おきくらいにタバコを吸いに外に出ていきます」

店長、キャベツを食べ始める。

従業員たちの声（声）「店長は、チョコレートをよく食べています」
従業員たちの声（声）「店長は、いつもしんどそうで、やつれています」
従業員たちの声（声）「店長は、自分の家族が大好きで、子どもの写真をよく見せてきます」
従業員たちの声（声）「店長は、お店が忙しい間は、お店の前のネットカフェに泊まっています」
従業員たちの声（声）「店長は、売上がよくない日はすぐに割引をはじめます」

「従業員たちの声」はハザマの声に切り替わる。

ハザマ（声）「店長。……すいません。さっき保育園から電話がかかってきて、子供が熱ですぐに迎えに行かないといけないんですけど、……お客さんが少なくなってきたら、……仕事途中で抜けさせてもらえないでしょうか」

店長、キャベツを食べる手が止まる。思い出す。

店長（声）「ハザマさん。時間になったし、今からグリーティングイベント始めるね。いつものように元気な対応、よろしくお願いします！」
従業員（声）「はーい、みなさんこんにちはー。本日はご来店いただきまして、誠にありがとうございまーす。今からグリーティングイベントを始めたいと思いまーす。

店長、なにかを振り切るように、再びキャベツを食べ始める。

従業員（声）「はい、今日はですね、このお店のマスコットキャラクター、ひーくんが一日店長に就任をいたしました。一日店長ということで店長が実際にやっているお仕事をお手伝いするわけなんですが、ひーくんにできるのでしょうか。店内チェックがあったり、お掃除があったり、お客様へのご挨拶があったりということなんですが、皆さんの前で、ばっち

り店長のお仕事ができるように頑張ってもらいたいと思いまーす。みなさん、ぜひ、応援よろしくお願いしまーす。それでは、サカモト店長にお手本をお願いしたいと思います。サカモト店長、お願いします」
店長（声）「はい、了解しました。スタッフ全員で元気にいきましょう。それでは参ります」

店長、その場にしゃがみ込んで、キャベツを自分の頭に打ちつける。ガンガンと何度も繰り返す。

店長（声）「いらっしゃいませ」
従業員（声）「いらっしゃいませ」
店長（声）「ありがとうございました」
従業員（声）「ありがとうございました」
店長（声）「大変申し訳ございません」
従業員（声）「大変申し訳ございません」
店長（声）「またお越しくださいませ」
従業員（声）「またお越しくださいませ」

何度も繰り返す。

店長（声）「いらっしゃいませ」
従業員（声）「いらっしゃいませ」
店長（声）「ありがとうございました」
従業員（声）「ありがとうございました」
店長（声）「大変申し訳ございません」
従業員（声）「大変申し訳ございません」
店長（声）「またお越しくださいませ」
従業員（声）「またお越しくださいませ」

店長（声）「いらっしゃいませ！」

店長、キャベツを頭に打ちつけるのを止める。
店長、掃除道具を持って売り場から出て行く。

5

夕方のスーパーマーケット。

ハザマがレジに立ち、なにかふっ切れたように元気に買い物客の対応をしている。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,500円でございます。2,000円お預かりいたします。500円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ。いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、2,300円でございます。3,000円お預かりいたします。700円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「お疲れ様」

ハザマ「お疲れさまです」

店長（声）「レジ回りの掃除もお願いします」

ハザマ「はい」

店長の声は少し優しく聞こえる。

ハザマは気持がすっきりしていて、テキパキと仕事をこなしている。

ハザマ、レジ周りの掃除をする。

店長（声）「ハザマさん」

ハザマ「はい」

店長（声）「何度もごめんね」

ハザマ「いえ」

店長（声）「それ終わったら売り場の温度チェックと、品出しもお願いします」

ハザマ「わかりました」

ハザマ、売り場の温度チェックと、品出しを始める。

男が買い物にやって来る。

ハザマ、作業をしながら男に向かって、

ハザマ「いらっしゃいませ」

ハザマ、作業を続ける。男は買い物を始める。静かな時間が流れる。

不意に、男が手を滑らせてペットボトルのお茶を床に落としてしまう。
ハザマと男は、落ちたペットボトルを見ている。

長い沈黙。

ハザマ、ペットボトルを拾い、男に手渡す。
男は、軽く頭を下げ、受け取る。

ハザマは以前にもこんな事があったことを思い出す。

店長（声）「ハザマさん」
ハザマ「はい」
店長（声）「レジお願いします」
ハザマ「わかりました」

ハザマ、レジに立つ。レジのルーティンが始まる。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、900円でございます。1,000円お預かりいたします。100円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

ピッ、ピッ、という商品のバーコードを読み取る無機質な機械音。
男は聞き続けている。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,500円でございます。2,000円お預かりいたします。500円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

男は持っていた買物かごをゆっくりと床に置く。ハザマの声と機械音を聞き続けている。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか。お会計、1,200円でございます。2,000円お預かりいたします。800円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

レジを続けるハザマと、声と音を聞き続けている男。

ハザマ「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか。ポイントカードはお持ちでしょうか」

ピッ、ピッ、という無機質な機械音が永遠に続く。

やがて、男はレジに向かってゆっくりと歩く。ポケットからナイフを取り出す。

男、ナイフでハザマを背後から刺す。ハザマはレジの仕事を続ける。

男は何度もナイフでハザマを刺すが、ハザマはレジの仕事を止めようとしない。
ピッ、ピッ、という無機質な機械音が永遠に続く。

やがて、ハザマは床に倒れる。
男はその場に立ち尽くしている。

ピッ、ピッ、という無機質な機械音がようやく止む。

スーパーマーケットの機能が停止し、世界の時間が止まる。

長い沈黙。

やがて、何ごともなかったかのように、再びスーパーマーケットの営業が再開する。
店内に軽快なBGMが流れ、従業員と買い物客が現れる。従業員はレジに立ち、買い物客は買物を始める。

従業員「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか」
買い物客A「いらないです」
従業員「ポイントカードはお持ちでしょうか」
買い物客A「持ってないです」
従業員「お会計、1,500円でございます。2,000円お預かりいたします。500円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

男は立ったままレジの中にいて、まるで石化したように動かず、体が固まっている。
従業員や買い物客には、男の存在が見えなくなっている。
床に倒れたハザマの存在もいつのまにか消えている。
従業員「いらっしゃいませ、こんにちは。レジ袋はご入用でしょうか」
買い物客B「いらないです」

従業員「ポイントカードはお持ちでしょうか」

買い物客B「持ってないです」

従業員「お会計、3,400円でございます。3,500円お預かりいたします。100円のお返しとレシートでございます。ありがとうございます、またお越しくださいませ」

店長（声）「山田さん」

従業員「はい」

店長（声）「お疲れさま」

従業員「お疲れさまです」

店長（声）「そろそろ閉店するし、閉店作業お願いします」

従業員「わかりました」

従業員、バックヤードに行く。店内のBGMが「蛍の光」に切り替わる。

従業員、店内の片付けを始める。（※舞台上にある全ての物を舞台裏に片付ける）

やがて、すべての物がなくなり、男だけがとり残される。

長いあいだ、「蛍の光」が繰り返し流れている。

やがて「蛍の光」も止む。

男の存在だけになった空間は、もはやスーパーマーケットですらなくなる。

ハザマが子供を自転車に乗せてやってくる。

自転車を停め、子供を下ろすと、そこは公園になっている。

男は固まったまま動かない。

ハザマ「何して遊ぶ？ ……ブランコ？ じゃあお母さん押してあげる」

ハザマ、子供が乗ったブランコを押す。男は固まったまま動かない。

ハザマ「今日保育園どうやった？ 何して遊んだ？ ……なわとびか。楽しかった？ ……よかったね。……終わり？」

ハザマ、子供と砂場へ。男は固まったまま動かない。

ハザマ「何作ってるの？ ……家？ 誰の？ ……おじいちゃんか。玄関は？」

ハザマ、砂で山を作る。山の上に一本の木の枝をさす。男は固まったまま動かない。

ハザマ「じゃあゲームしよ。これ知ってる？ この木の棒を倒したら負けで、順番にこうやって砂をとっていくゲーム。先やっていいよ」

子供と棒倒しを始める。男は固まったまま動かない。

ハザマ「おー。……ふふ」

棒倒しを続ける。男は固まったまま動かない。

ハザマ「あ！ あー、倒れちゃった。お母さんの負け」

（終わり）